「喜悦の盈満」

第九講「変貌の秘儀」

ローマ人への手紙12章1～2節

第九講 「変貌の秘儀」

一、はじめに

二、「されば兄弟よ」

三、心の更新

四、継続と完成

一、はじめに

自分を変えていただく＝変貌とは何であり、どうしたら可能であるか

1節冒頭の「ですから」は、1～11章全体を受けている接続詞。

1～11章に、贖いの経綸を解説している。

経綸＝神がご自分の民の救いのために、宇宙万物の運行と秩序と時間を最も適切に調節し、分配、配列、計画、支配しながら、いっさいを管理するすべての過程。その焦点は、罪の中にいる人類への救いを完全に成し遂げること。その実現は、教会とキリストにかかっている。

この理論的部分を受け、12章からは、どう生活すべきかを語っている。

二、「されば兄弟よ（ですから、兄弟たち）」

教理的部分から実践的部分に入る序論的真理。

（1） 3節以下に記されていることが実践できるためには、何をするか（doing）よりも、どうあるべきか（being）の問題が先。
本質を変えずに生活と行為だけを改めようとしてはならない。

（2）（イ） クリスチャンは、世と調子を合わせる（conform）のではなく、変えていただき（transform）続けなければならない。

（ロ） 救われた後、クリスチャンがたどる、二通りの方向がある。
だんだんこの世に染まって、世の中の人と同じ人間に戻る人。
姿変わりを継続して、この世のものでない風格と品位を得ていく人。

これはどこに目をつけているかに左右される。人は見ているものに同化されていく。

この変貌がたどり着く究極はイエスさまと同じにされるということ。
この希望は冗談事ではない

三、 心の更新

クリスチャンが救われたのは、変貌してイエスさまに似ていくため。

・そのための先行的条件が、心の更新。
外側の変貌は、内側の改変なしにはできない。

・心が変えられるためには、さらに先行する条件がある。
→自分の身を神さまのみこころにかなう生きた供え物として献げること。

献身と心の改変と外側の変貌は、一直線をなしている。

神さまの恵みのわざには、神さまがなさる部分と私たち自身がしなければならない部分がある。
私たちが自分の生涯を具体的に神の前に献げるとき、神さまは心を新しくしてくださる。

四、 継続と完成

献げて心を新しくしていただいた後の継続がさらに重要。

第一の全き献身は人間のすべきこと。
第二の心の改変は神のわざ。
第三の姿変わりは、神のわざであるが、同時に私たちに責任がある。

自らの品性、性格は築き上げてゆかなければならないもの。

「きよめ」の状態を土台として、そこに立脚し、その法則にのっとって、日常生活の中で絶えず善を選択し続けることによってだけ、それは可能。

しかしその動力は、心を新しくされた神さまの恵みであることを忘れてはいけない。

きよめられた後の生涯は祭壇の延長である。
どんな問題であろうと、ありのままに神さまの壇の上に横たわる。
そのことによって、弱点や欠点も征服していくことができる。

まとめ

変貌の秘儀は―
「きよめ」の条件を果たしたら、それを継続すること。
　それによって変貌され続けることができる。

この道をたどるときに与えられるのは、自分が神のみむねにかなっている
という納得。 そしてすべてのことを感謝できる者となる。

全的献身から心の改変を通過して、祭壇の生涯の継続によって、外側の生涯
の変貌を継続し、いつでも心の中に神様に嘉納されている保証とうなずきを
持って生活できる。

そのためにまず重要なのは、献げぬくという実行。
それは実行するなら、経験的にわかる真理。